

## 「漢字教育で育った集中力や語彙の豊かさが成長の土台に」

第一・第二ひかり幼稚園(川崎市)

理事長 松本壯次氏

私どもの園が石井式漢字教育に取り組みはじめたのは昭和四十三年です。まだ先代の理事長・吉田尚弘の頃で関東では最初の石井式の実践園としてスタートしました。

当時のことは私も話に聞いているだけですが、やはり周囲には「なぜ、幼稚園児に漢字なんか」という抵抗感が相当あったようです。ところがそれも、実際に子どもたちがこともなげに漢字を覚えたり、さらには漢字教育を通して成長していったりする姿を見ていただくことで、保護者の方からも深い理解を得られるようになりました。

今や漢字教育は、25年前から導入している「はだか保育」と並んで、当園の教育の柱にもなっています。

漢字教育の効果として、まずはっきりと現れてくるのは、集中力です。園児たちがなかなか先生の話をおききと聞いてくれない、という悩みを幼稚園関係者からよく耳にしますが、年少の頃から、漢字カードや絵本をみんなで声を合わせて読み、また出席をとったり、お話をするときも、その都度漢字カードを見せながら進めていくと、子どもたちは、先生が何か話しているときには、きちんと目と耳を集中させる習慣が自然に身についてくるのです。

そして、もう一つ大きいのが、漢字を通して語彙が豊かになっていくということでしょう。当園では、学年別に月毎に割り振られた20～30枚程度の漢字カードや漢字の絵本の他、<sup>ことわざ</sup>諺や俳句、『百人一首』、詩、『論語』などのさまざまな古典や名作を教材として使っています。これらは、幼児が深い意味まで理解するのは無理ですが、それはそれでいいのです。

以前、地震の避難訓練で先生が机の下に入るよう指示したところ、園児のひとりが隣の友達を見て「それは、頭隠して尻隠さず、だね」なんて言ったのを聞いて、なかなかうまいことを言うものだと思心させられました。

もちろん、見たまを習った諺に当てはめただけで、的確な使い方ではないかもしれませんが、しかし、今は子どもなりの理解でしかなくても、言葉として頭に残っていれば、大人たちの会話を問いたり、本を読んだりしているうちに、だんだん本来の意味がわかってくる、そうした自分で発見する喜びを残しておいてあげることが大切なのです。

『論語』なども、まさにそうです。幼児の頃は丸暗記しただけにすぎなくとも、10代になって読み返してみると、「ああ、あれはそういう意味だったのか」とわかるようになる。また30代、40代……、そして70代になったときには70代なりの理解があつていい。むしろ、それこそが本当の意味での教育ではないかと思ひます。

また、語彙が豊かになれば、言葉の組み合わせもどんどん増えていくわけですから、当然表現力や理解力、思考力も育っていきます。

ですから、小学校へ行っても、先生の話がよくわかるし、わかるから授業が面白くなります。本を読むことにまったく抵抗がないので、自分の興味に応じて、どんどん世界を広げていくこともできます。

私どもとしては、決して小学校の準備教育として、漢字教育を取り入れているわけではありませんが、すべての教科のベースとなる国語の力を育てることは、結果として小学校での生活を意欲的に送るための土台づくりにもなっていると言えるでしょう。

日本の幼児教育は、まだまだ「子どもをのびのびと遊ばせて、個性を育てる」という自由保育が主流を占めていますが、真の個性や主体性といったものは、自ら考える力が身についてこそ生まれてくるものであって、ただ好きに遊ばせておけば自然に育つというものでは決してないはずです。

まして、大脳生理学的に見ても、幼児期は言葉を吸収するのにもっとも適した時期ですから、この限られた貴重な時間に、楽しみながらたくさんの言葉に触れさせてあげることが、言葉の動物・人間としての成長にも大きな意味をもっていると確信しています。